

古代・中世史から見た多摩地域の「独立」気風[†]

諸橋 正幸^{*1}

多摩大学経営情報学部^{*1}

東京（江戸）が日本の政治・経済・文化の中心になる前の古代から中世における広域多摩地域住民の気風を、多摩を中心とした地政学的観点から探る。

歴史現象から導き出された多摩人の気風は、(1) 武蔵七党などに見られる血縁関係による小規模で結束の固い自衛集団（武士団）を核に外の権力構造との（協力／反抗）関係を独自に判断し行動する独立心、(2) 自らを中心とした大きな組織を構成することを嫌い、「一所懸命の契約関係」のもと、外部に指導者を求めてその権力に自らを委ねる組織化力の弱さ、(3) 馬という移動手段を利用して広範囲にわたり収集した情報を基に、地政学的観点から時代の流れをいち早く捉え、積極的に外へ出て行くすばやい判断力と行動力、さらに馬の機動力を支える鎌倉街道を始めとする街道群、(4) 外部に求める指導者の資質として優れた武力と同時に、桓武平氏・清和源氏に代表される天皇家に繋がるような血筋を求めることである。

The paper investigates, from the geopolitical point of view, the spirits of the people who had lived in the extended Tama area in ancient-to-middle ages, before Edo (Tokyo) had not become the Japanese cultural, economical nor political center yet. In the result, we found the following characteristics: (1) they established small clans (Bushidan in Japanese) based on family members, who tried to unite, not the neighboring ones, but the political rights outside, (2) they could not become to be bigger clans because of their independent spirit, (3) they made quick and proper tactical decisions by their cavalry, (4) they recognized as a leader who had superior strength and nobility like Kanmu-Heishi, and Seiwa-Genji.

キーワード: 多摩地域, 武士団, 一所懸命, 騎馬戦闘技術, 貴種, 鎌倉街道

Key Words: Tama Area, Clan, *Issho-Kenmei* (special agreement with a leader and his associates), Cavalry, Nobility, Routes to Kamakura

2011年2月3日受理

† Masayuki MOROHASHI^{*1} : Tama People's Frontier Spirit Established in Ancient-to-Middle Ages

School of Management & Information Sciences^{*1} , Tama University, 4-1-1 Hijirigaoka, Tama-shi, Tokyo, 206-0022 Japan

1. はじめに

本論文は、上古から中世を通じて培われてきた多摩人（多摩地域住民）の気風について論考するものである。古来より坂東の中心的存在の一つ（特に中世以降存在感を増すようになる）である多摩川流域は、日本の政治・経済の中心である畿内と、未開の地でありながらも豊富な地下資源（特に金鉱）を利して独自の文化圏を形成した奥州を結ぶ線上の中程に位置し、そのため、政治紛争や軍事衝突の絶えない場所でもあり、その時々政治・軍事情勢により様々な地域や人との対立と交流を経て技術や文化を育み、そうしたことが独自の気風を生み出す要因となった。このような土壌風土の中で育まれた多摩の気風を歴史的・地政学的観点から把握し、彼らの行動形態を理解することが本稿の目的である。

2. 本稿が対象とする多摩地域

本稿で対象とした地域はタイトルにもあるとおり多摩地方を中心としたものであるが、その地政学的位置づけを明らかにする上では、従来の「多摩」以上に広い地域をひとつの気風を共有する場所としてとらえる必要がある。そこで、本稿において「多摩」として言及する地域をまず明らかにしておく。

2.1 多摩として言及する地理的範囲

本論を展開するに先だって最初に行わなければならないことは、多摩地域の範囲を規定することである。古代・中世における多摩を行政区域として捉えるならば、武蔵国多摩郡⁽¹⁾がもっとも妥当な定義であろう。この名称は、維新後の廃藩置県で4郡（東、西、南、北）に細分化される⁽²⁾までは、永らく多摩川の上・中流域を指す呼称であった。しかしながら、本稿のテーマを考えた場合、気風を探るための地勢的・文化的・政治的な独自性をこの地域に限定するにはあまりに範囲が狭く、より広い地域設定が必要となる。そこで本論文では、武蔵・相模両国（現在の埼玉県、東京都、神奈川県に相当）を多摩地域とする（図1の斜線部）。なお、以後「多摩」と記す場合はこの広域多摩地域を指すものとし、武蔵国多摩郡については多摩郡の名称を用いる。

多摩の地理的領域の西は関東山地で区切られる。ここには、箱根峠や足柄峠を越えて京へと至る、いわゆる東海道の間がある。また、南は太平洋に面しており、中世において物流を中心とする海路開拓がなされるまでは、三浦半島と房総半島を結ぶ浦賀水道が唯一の海路ルートであった⁽³⁾。東および北東の境には旧利根川が横たわる。利根川は関東平野第一の大河であり、また、源流に豪雪地帯を控えていることから水量が多いため氾濫もしばしば起こり、物資や軍隊の移動の点からは峠以上の難所であった。特に、東京湾岸江東地区付近では他にも太日川（江戸川）や入間川（荒川）の河口が集中し、利根川の流れを変える土木工事が行われた江戸期までは恒久的な橋も架けられない状況であった⁽⁴⁾。そのため、より確実な徒歩による渡河を行うには、浅瀬がある上流地点

まで大きく迂回する必要があるが、それでも、春の雪解けシーズンや長雨の時期は、長期間足止めされる恐れは避けられなかった。北は唯一の開口部であり、関東山地の裾野を入間川沿いに遡ることによって比較的楽に上野国の国府(群馬県安中市)に出ることができる。これは現在のJR八高線のルートと考えてよく、先に述べた利根川上流で川を渡る迂回路はまさにここを通る(深谷・前橋あたりで渡河することになる⁽⁵⁾)。



図1 多摩の地理的言及範囲



図2 古代の街道

2.2 地政学的位置づけ

多摩を含む坂東一帯は、大和朝廷による東征により、かなり早い時期から(記紀の記述によれば景行天皇の御代、4世紀頃?)その版図に組み込まれた⁽⁶⁾。その後整備された古代律令制に基づく列島の行政区分「五畿七道⁽⁷⁾」の中で、多摩を構成する二国のうち、相模は東海道に属し、武蔵は当初東山道、平安朝以降は東海道に編入される。この経緯の中で武蔵国府(府中市)を經由して相模国府⁽⁸⁾と上野国府(安中市)を結ぶ武蔵路が整備され、多摩郡は東海道⁽⁹⁾・東山道のどちらにも容易に出られる重要拠点になる。なお、武蔵路は後に鎌倉街道上道(かみつみち)⁽¹⁰⁾と呼ばれ、その戦略的重要性はさらに上がることになる(図2参照)。

663年、白村江で唐・新羅連合軍に敗れて朝鮮半島から駆逐された大和朝廷は、唐・新羅軍の逆上陸を恐れて全国から防人を北九州沿岸に集めて防備にあたらせるが、多摩を含む坂東は九州南部とともに兵役の割り当てが厳しかった⁽¹¹⁾。また、防人の任期は一応3年となっているが、ほとんど帰されることがないことは『日本霊異記』の話でも伺い知れる⁽¹²⁾。坂東各国で徴兵された兵士らが西国へ向かうには、東山道や東海道を利用して難波へ出、そこから海路九州へ行くルートを通るが、多摩郡からは主に東海道が用いられたらしく、武蔵国府の南にあたる現多摩市の「よこやまの道」として整備された古道には「防人見返りの峠」がある⁽¹³⁾。

上記の防人の制度と相前後して、大和朝廷は奥州へも進出する。奥州は658年の阿倍比羅夫の本格遠征以来表面上は大和朝廷下に属していたが、中央の施策と距離を置く独自の動きを続けて何度も反乱を起こしている⁽¹⁴⁾。この不穏な地域の平定にも坂東諸国の兵士がかり出された。多摩から奥州に進軍するには、武蔵路を北上して上野国へ出、そこから東山道を北東へ向かって(各地の兵士と合流しながら)白河の関から陸奥へ入るルートを進ることになる。鎌倉時代以降は奥州の力が強まり、一方的に攻め込まれるよりも、南北朝時代の北畠顕家(南朝の重鎮北畠親房の長男)や戦国時代の伊達政宗のように北から坂東に圧力をかける状況(下野や常陸で戦闘を繰り返す)が多くなる。

平将門の乱(939-940)が朝廷に衝撃を与えて以来⁽¹⁵⁾、板東と京都は緊張関係に入りしばしば衝突を経験するが、朝廷側が板東に攻め込む場合は、東山道で上野国に入るルートと東海道で相模国に入るルート(時代がさがるにしたがってこちらのルートが多くなる)が戦略上重要になる。特に、攻撃・防御の要所となる峠(東山道の碓氷峠、東海道の足柄・箱根峠)を誰が抑えるかが勝敗の帰趨を決める鍵となる。室町末期から戦国時代に入ると峠を抑えた武田氏(大菩薩峠)、上杉氏(三国峠)、後北条氏⁽¹⁶⁾(足柄・箱根峠)が板東の覇権争いの主役となった。

図2に見るように主要道が交わる個所は板東には2か所(上野国と多摩)ある。街道(輸送ルート)はいつの時代にも政治・経済・軍事において重要な役割を担うが、古代においては大河が大きな障害となったため山間を通る東山道が多用され、渡河技術の発達とともに東海道が多用されるようになる。その流れの中で多摩は常に要の位置にあった。すなわち、古代においては東山道を用いた奥州侵略の後方兵站基地としての役割を果たし、軍事的発言力が増す中世以降は、東海道を通じて京都と対抗する東の政治拠点になる。なお、経済的にも畿内と対抗できるようになる江戸期以降は、絹織物・材木等の生産地と江戸(開国後は欧米諸国)という大消費地とを結ぶ中継地として脚光を浴びることになる。いずれの時代においても、武蔵路(鎌倉街道)が常にその中心にあったことは特筆すべきことである。

3. 地域特性の萌芽期

ここでは多摩の気風が形作られる要因を、古代から平安前期における文化・産業の両面から探る。

3.1 人的交流と文化移入

古代においては、多摩は大和朝廷の政策のもと、強制移住による人的交流が頻繁に行われた。以下にその流れを3つに分けて述べる。

第1の動きは朝鮮半島情勢を反映したもので、防人としての多摩人の北九州派遣と畿内在住帰化人の多摩への強制移住である。防人の場合は、兵士として徴用される際の武具・防具は自前で調達することになっており、難波までの移動手段として馬を用いるならばそれも自前となる(注釈

(13) はそれをしてやれない妻の悲哀を詠ったもの)。これにより、坂東では徴用対象である農民層の武装化が当たり前になる。帰化人の移住は、新羅との緊張関係に対応して彼らが日本で反政府活動を行うことを恐れた措置と思われる。彼らを一箇所に集めて監視するための移住地として設定されたのが、都から離れ、かつ、勇猛な民のいる武蔵国で、高句麗からの難民を引き取った高麗郡（日高市・飯能市）および多摩郡狛江郷（狛江市）、新羅人の帰投者を集めた新羅郡（後の新倉郡—現新座市・和光市・朝霞市）である⁽¹⁷⁾。彼らとともに織物技術⁽¹⁸⁾や公文書作成・管理技術⁽¹⁹⁾が多摩を中心として坂東一円へと広がった。

第2の動きは陸奥に絡むものである。阿部阿倍比羅夫以来、何度かの反乱を制圧しながら北上川沿いに前線基地を築き上げた朝廷は、現地の政情安定のために坂東を中心とした多くの兵士を送り込む。北山(2009)によれば、「724年(神亀元)の征討⁽²⁰⁾にさいしては、『坂東8国の軍3万人』が騎射を教習し、軍陣を試練させられている。それだけではない。『綵帛(あやぎぬ)200疋、あしぎぬ1,000疋、綿6,000屯(とん)、布10,000端(たん)』を陸奥の鎮所に運ぶことを命ぜられている。しかも、それは、一度きりのことではなく、むしろ軍事上の慣例になって、桓武朝の数次にわたる大征伐(東北38年戦争のこと、本論文注釈(14)を参照のこと)に及ぶのである。その間に、相模、上総、上野、武蔵、下野の6国の『富民千戸』が、政府によって強制的に陸奥に移され、前線の柵に配置された。(中略)かりに戸の人数を15人とふんでも、15,000人の大移動である。」(北山, 2009, pp. 19)とある。

逆に、朝廷は奥州の地から坂東へ蝦夷を連れてくる政策も実施した。彼らは俘囚あるいは夷俘と呼ばれ、強硬な反抗分子を奥州から隔離するとともに、彼らの弓馬術を軍事警察力として利用しようとしたものである。俘囚の人数を直接記録した文書は見つからないようだが、彼らに支給した食費の記録から坂東に移り住んだ俘囚の数を推定すると、3,000人になるという(福田, 2009, pp. 16-17)。

第3の動きは中央官僚および軍人(指揮官)の地方派遣である。律令制の下で国司らは中央で任命され、守、介として各国へ派遣された。彼らは通常4~6年程度で任を解かれて中央へ帰ることになっていたが(注釈(4)で触れた更科日記は、著者の父菅原孝標が上総介の任期明けで家族とともに京都に帰る旅の場面から始まる)、律令制が徐々に緩んでくる平安期になると、中央に戻っても次のあてがない、または、中央での出世コースから外れた官僚らは任期中から蓄財に励み、そのまま任地に(無官で)留まるケースが増え(中央官僚の土豪化)、新たに任命された国司と対立することが多くなる。こうした事象は多摩に限ったことではなく、豊後国の前介中井王の私税徴収事件(842年に国衙より太宰府に申達されたが、そのままに放置されたようである)や対馬の郡司による国司立野正岑殺害事件(857)等、全国に広く見られるが、上記の動きと相まって多摩独自の武士団を創り出す一因になった。また、奥州をはじめ坂東各地で勃発する大規模な反乱に対して派遣される指揮官(将軍)も中央で任命されて現地へ着任するが、征討軍の主力を坂東で徴集す

ることから地元の有力土豪との結びつきが強くなる（後に近隣の国司が中央から将軍に任命されることが増える）。都から派遣された有能な官僚・軍人と多摩の有力土豪が結びつくことで新たな歴史の展開が始まる例は次章で述べる。

朝廷の政治的動きにより、多摩には帰化人、蝦夷、中央の王族・貴族・官僚など様々な人々が入り込んでいるが、天皇家・貴族の血筋に拘る以外には別段の差別や孤立化は見られない。また血筋についても、決して純血を守る訳ではなく、有力土豪が積極的に彼らを迎え入れ、自分たちの血族に貴族の血が入ることを誇ったことを考えると、決してよそ者として彼らを扱ったわけではないことがわかる。こうした比較的自由な人的・文化的交流が大きな軋轢なしに行われた背景には、多摩を含む坂東自体が中央政権から見ると植民地であったこと（流入してきた人々の多くが同様の境遇にあるか中央での権力争いに敗れた人だった）、多くの植民地政策と違って一方的搾取が行われなかったこと（この要因としてはすぐ北に控える奥州の脅威に対抗する手段として坂東の武力増強に現地の住民を巻き込んだことが大きい）、また、搾取に耐えるだけの豊かさがこの地にもともとあったこと（温暖な気候と肥えた土壌を持つ広大な平野があった）、が挙げられよう。こうした積極的な外部の血（文化）を取り入れる姿勢（とそれが許される強さ・豊かさ）が多摩の先進性を育む要因となった。

3.2 産業

古代律令用国家下での行政区分と各地域の格付けは、米の収穫量で区分された。それに基づく分類⁽²¹⁾によれば、坂東一帯がほぼ最上位の大国に属する中、武蔵もまた大国であり、相模は2番目の上国に属する。ただし、水郷地帯を擁する常陸、下総に比べると水田耕作地は大きな広がりを見せていない。武蔵国における水田耕地の分布をみても、東京湾岸に近い沼沢地よりも山地や丘陵の裾野あたりの開拓が多く、広大な水田開拓が行えるような地形的広がりを持たない。稲の成育に合わせて田に引く水の増減（最後には完全に抜き取る）を調整するには、天候や季節によって水量が大きく変化する大河の中・下流域よりも、たとえ全体の水量が少なくともコンスタントな水流が見込まれる山の麓の小川や湧き水の方が有利であり、さらには、田自体に緩い段差があることで、水管理は容易に行えるが、耕作面積自体を広げるには不利である。

逆に、起伏は多いが高い山はなく草原が広がる多摩は、広葉林の下草を利用した馬の放牧地として知られており⁽²²⁾、特に、秩父氏が代々別当を務めた秩父牧、日奉（ひまつり）氏の管理する武蔵四牧（石川・小川・由比・立野牧—立川・八王子・あきる野一帯に点在）や小野氏の小野牧（日野市）等での馬牧が有名である。軍馬の利用は、もともと蝦夷ら狩猟民の得意とするところであり、当初、種馬は奥州産のものが優秀とされていたが、坂東の地で放牧され軍馬としての訓練をすることでしだいに軍馬生産の地としての位置づけが強まった。

奥州との長い戦いの中で、坂東には様々な武士団が成立するが、彼らの強さを支える武器・防具の発達が大きく寄与したことを忘れてはならない。甲冑でいえば、埴輪に見られる挂甲（けい

こう）や中世ヨーロッパの騎士が用いたような鉄製短甲から合戦絵巻の騎馬武者の着用する大鎧への発展期は9～11世紀のことと思われる。大鎧は短冊型の鞣革（なめしがわ）や鉄片を糸で緘（おど）したもので、奥州の鞣革技術がこの鎧作成法に寄与していることは明白である。その他にも馬上から使うための刀の反り（日本刀の原型）の発明や馬具の発達も、同時期にこの地を中心に行われた。武具・防具・馬具の主要な原料である製鉄技術についても、小規模な製鉄遺跡が関東各地で発見されていることも坂東の先端的兵装技術を支える傍証となっている。なお、関東の製鉄遺跡に関しては福田（2009）に詳しく紹介されている。

帰化人のもたらした織物技術も多摩を潤す産業活動の一つであり、租庸調の「調」として、朝廷にも多数納められた。調布を名乗る村は、多摩郡およびその周辺に限っても少なくとも3カ所（調布市、青梅市、世田谷区—田園調布）存在した。

4. 中世史から浮き彫りになる気風

前章では、古代を中心にして多摩気風の萌芽となる要因を見てきたが、ここでは中世（平安後期から戦国期まで）に目を転じて気風が明確になる過程を、多摩人の団結の基本単位、戦闘形態、中央政権との関わり、指導者の選定の観点から追う。

4.1 血族による団結ならびに棟梁とのゆるい関係

律令制のもとで全ての農民は大和朝廷から田（口分田）を与えられ、その収穫の中から一定量（出来高の割合ではなく、田の大きさに合わせた絶対量）を税として納める形をとるが、農業が本質的に労働集約型の産業である以上、労働力の多寡（たとえば家族の人数）が貧富の差に繋がる。税徴収に耐えられなくなった家は、次の年の種もみを残す余裕がなく、翌年に高利で借りるか、場合によっては田を放棄して逃亡する状況に追い込まれる一方、富める者は、秋には春に貸した種もみの何倍もの量の収穫を自分の手をかけずに得ることができるようになる。富める者を中心に大きくなった営農集団（土豪＝武士団）は、やがて近隣集団と土地争いを繰り返すことになる。ところが、板東のように都から遠い地域では、現地に派遣された守・介職にある者（各国の官僚トップ＝受領）の独断でものが決まるケースが多く公正な裁判が期待できなかった。しかも、公正な判断を求めるべく朝廷に直接訴え出ている間に田畑を根こそぎ取られてしまうという場合すらある。そこで、彼らは直接武力に訴えて争いの相手やときには受領と直接対決したりすることが頻発する。場合によっては、土豪らが国衙を襲い国庫に納めた米を掠奪するケースまで発生するようになる。

こうした動きは平安中期にはすでに全国に広がっていたが、板東の場合は騎馬による機動性という特徴があるため、いくつかの土豪が広範囲にわたって集団行動するケースが多く、争いが大規模になる傾向があった。特に多摩では、先に述べたように耕作地がもともと少ないことがあって武士団の規模が小さく、単独で動くケースよりも徒党を組むことが多かったが、後に述べるように

この集団の中から強力な指導者が出ることはなかった。あまりにも利害関係が密接なために互いに牽制し合い、仲間内で権力が一つに集中することを嫌ったためと思われる。

多摩の中小武士団の中で統一行動をとるグループを党という名で呼ぶ場合が多いが、主な党には、秩父党（秩父盆地から新座、豊島、葛西あたりを中心にしたグループ）・武蔵七党（府中、八王子、日野を中心とした中小のグループ）・鎌倉党（鎌倉を中心にしたグループ）・三浦党（三浦半島を中心としたグループで石橋山の敗戦後に頼朝を安房に逃亡させたことで有名）などがあり⁽²³⁾、規模こそ小さいが戦乱の中で名を残した英雄を数多く輩出している。彼らが最も活躍した時期は鎌倉幕府成立の前後である（北条時政の粛清で多くの有力党が没落するが、武士団自体は戦国時代まで生き延びる）。

多摩武士団の行動原理を表現した言葉に「一所懸命」がある。彼らにとって最も重要なものは領地の安全な確保（所領安堵）であり、その目的のためには自分の命と引き換えにしても構わないとする考え方をいう。ただし、この所領安堵は領地争いで敵対する直接の相手からの安全を指すわけではなく、その仲裁をする支配者に向けたものである。それが時の政権体制であれ、多摩を含む一地域を支配する権力であれ、その体制の中でむやみに領地を没収されないことを担保することを指す。所領安堵のために武士団が行う「一所懸命」で一番効果があるのは戦場で手柄を立てることである。手柄として最も重視されたのは先陣を切ることと敵将の首級をあげることである。先陣争いでは、敵の防御陣に単独で切り込む恐怖を克服することの他に、先陣争いに加わる味方を如何に出し抜くかという意味合いも含んだ争いであり、佐々木高綱と梶原景季の騎馬による宇治川渡河の先陣争いでは、川の中程で高綱が景季に「馬の腹帯が緩んでいる」と声をかけ景季が腹帯を調べている間に渡りきり先陣をきったという逸話が残されている⁽²⁴⁾。

「一所懸命」は軍隊の攻撃力を最大限に発揮させる強力な効果を持っているが、逆にこれが機能しなくなる局面もある。第1は、棟梁（指導者）がその権力を失うときである。しかしながら、合戦場で敗色が濃くなる場面では、逆に起死回生の働きが論功第一になる可能性があるため、離散者続出という事態は最終戦局にならない限りみられない。それよりも、一旦戦闘がやんだ後に離れていく場合が多い。また、棟梁が自分たちの利益にならない政策をとること（あるいはそう感じて）見放すケースもよく起きる。平将門が多摩武士団の強い支持を得たのは、武蔵の国司と武士団の抗争の仲裁に入り、交渉決裂後は武士団側に組したことがきっかけだったが、新皇を名乗って坂東八国の国司を追い出し、自分の親族だけを後釜にあてた人事が支持母体の武士団に疑問を生じさせ、自滅への道を辿ることになった。

第2の局面は、新恩給与ができなくなる場合である。戦場が多摩や板東といった比較的狭い地域で行われている場合には、棟梁は戦場で活躍した武士に対し、本来ある所領を安堵するだけで済んでいたが、鎌倉幕府ができ、全国に広がっていた平氏の所領を論功行賞として武士団に分け与えるようになると、彼らの期待も所領安堵だけでなく新たな知行地拝領（新恩給与）に向くようにな

る。それができなくなると、たちまち支持基盤が緩むことになる。元寇（1274—文永の役，1281—弘安の役）における北条時宗がその好例である。また，建武の中興（1333）での後醍醐天皇の論功行賞の下手際も，天皇を棟梁として仰いだ尊氏を始めとする有力武士団の離反を促した。

第3の局面は，棟梁と武士団の距離が遠くなる場合である。坂東武士の戦力が全国的にも認められる源平合戦（1180—1185）以降，戦場は西国へも広がり，戦場での武士の働きを棟梁が直接見る機会が減り，手柄を立てた武士らの不満を増大させる。足利尊氏の室町幕府設立もその要因を含んだままの政権奪取で，三男基氏を鎌倉公方として坂東に配置したり，補佐役として関東管領を置いて坂東武士団の人心掌握に努めるが，結局は統制がとれなくなって多摩はいち早く戦国時代に突入する⁽²⁵⁾。

第4に構造的問題がある。「一所懸命」は棟梁の下に兵士はすべて平等であるという構造を持つ。すなわち，先陣争いにせよ，敵将討ち取りにせよ，戦闘員の誰が行っても武士団としての論功行賞に軽重はない⁽²⁶⁾。数千程度の小規模軍団においてはこの形態でも十分戦力は保てる（特に構成員の技量が高い場合には）が，数万～十数万の規模の軍団が動く戦国末期にはこの方式はまったく役立たなくなる。

4.2 騎馬を中心とする戦闘形態

戦闘で馬を利用し，高さを利用した弓・刀の威力と機動性で敵を圧倒する戦法は，奥州との戦いを通して手に入れたと思われる。古代からの戦闘用具自前調達に則り，武士団の多くは領地内に軍馬放牧用の土地と調教用馬場を備えていた。騎馬武者としての彼らの技量は戦場ばかりでなく，都での治安維持・内裏の警護（滝口武士）・要人警護などでも活躍している。源頼光（941—1021）は摂関家の警護役として都で勇名を馳せた⁽²⁷⁾。彼自身は多田（兵庫県川西市）の出身だが，父満仲が鎮守府將軍だった関係から坂東にも関連が深く，頼光四天王のうち少なくとも3人は坂東武者である（渡辺綱—東京都港区綱町，碓井貞光—群馬県碓氷峠，坂田金時—神奈川県金時山）。

もともと騎馬戦は関東平野のような開けた土地での戦闘に適しており，どんな地形や戦法にも無敵というわけではない。実際に楠正成の山城に籠ってゲリラ戦を繰り広げる戦法にも北朝の多摩武者は大いにこずっているし，元寇での蒙古軍の短弓や火器を用いた集団戦術に対しては大きな損害を蒙っている。また，室町末期になると，騎馬に対抗する手段として足輕に長槍を持たせ馬を傷つける戦法が考え出され効果を発揮し始める。とはいえ，坂東武者による騎馬戦術は蝦夷討伐戦から武田騎馬隊が織田・徳川連合軍の鉄砲隊に敗れる長篠の戦い（1575）まで，千年近くにわたって日本の戦法の中心になっていた。ちなみに，甲斐武田氏は多摩武士にとっても身近な存在だった源義家の弟新羅三郎義光を祖とする清和源氏の流れを汲んでいる。

騎馬による戦いにおいて忘れてならないのは，それが集団戦法ではなくあくまでも個人戦であった点である。特に，騎馬同士がぶつかる，例えば保元の乱（1156）では，両軍合わせても数百騎ほ

どの武者が一騎打ちを繰り返す戦いだったという。ここにも戦い方の中に多摩の個人主義が表れている。

4.3 政治的限界

戦いには滅法強かった多摩武士団ではあったが、政治の権謀術数にはまったく歯が立たず中央政権の謀略の中で翻弄されていく。官吏としての能力は帰化人を通して多摩に持ち込まれたと思われるが、武力で紛争を解決してきた成功体験の中であまり活かされずに終わったようである。

前九年および後三年の役⁽¹⁴⁾で奥州平定に成功した源義家に対し、朝廷での発言力拡大をおそれた白河上皇は、位官の操作を繰り返して義家・義綱兄弟間の不和を助長し、また、対抗勢力として平正盛（清盛の祖父、当時は因幡の守）を大抜擢して源氏の内紛に介入させる等の工作を行い、源氏の勢力を潰えさせることに成功した⁽²⁸⁾。こうして、源義家を棟梁として仰いでいた多摩武士団も中央の政争に翻弄されていく（安田（2008）を参照のこと）。

清和源氏の本来の所領は畿内（摂津・河内・大和）にあり、源氏の棟梁らはもともと朝廷と多くの接触をもっていた。また、多摩以外の坂東武士団の棟梁の中にも、藤原秀郷（平将門を倒した人物）や足利尊氏（いずれも下野国出身）等、功を挙げた後に京都に留まり朝廷と関係を持つ人物も出てくるが、多摩武士にはそうした行動を積極的にとる者は見当たらない。支持する指導者に従っているうちに巻き込まれてしまうのが彼らの常であった。

武士団が政争に巻き込まれるケースは京都に限らない。鎌倉幕府樹立後に平氏討伐という目標を失い、源氏棟梁（頼朝）への求心力が弱まった武士団（御家人）に対し、頼朝の義父にあたる北条時政（伊豆の出身）は大粛清をかける。これは平時の政権運営における階層的組織作り（主従関係）の必要性から採られた措置ではあったが、多摩武士団の常識であった棟梁（鎌倉殿）の下には皆平等であるという考え方（同盟関係）とは真っ向から対立するものであり、排除されてしかるべき集団だったのであろう。とはいえ、北条時政は暗殺・だまし討ちといった手段で源平合戦で名をあげた多摩武士の棟梁たち（河越重頼、梶原景時、比企能員、畠山重忠ら）が殺され、北条義時の代になっても和田義盛や朝比奈義秀らが誅された。それに対し北条氏に対抗する外部指導者を見出せなかった多摩武士団は、組織的抵抗には至らなかった。

室町時代（1336-）に入ると幕府は鎌倉府を設置し、北条氏の残党やライバル新田氏の動きに目を光らせたが、逆にこれが紛争の火種になる。鎌倉府トップの公方職（足利氏）と補佐役の関東管領（上杉氏）の間の対立に京都本家の内紛や北条・新田等の反体制派が絡んで紛争は泥沼化し⁽²⁹⁾、多摩は他地域よりも早い時期から戦国という強力な棟梁無き多摩独立武士団による混沌の時代に突入する。まさに、アンシャンレジームの破壊には強力な勢力となる多摩武士も、その後の新体制確立には自らの力で対処できない弱点をここにさらけ出すことになった。

4.4 棟梁の資質に対する判断基準

日本全国に圧倒的な武力的優位を示した騎馬戦闘形態を生み出し、自らの権益を守るためのエネルギーを武力として対外的（対奥州，対京都，対西国）に示した多摩武士団であったが、一番の弱点は自ら指導者を生み出せなかったことである。そんな彼らが多摩の外に求めた棟梁の資質をここでは採り上げる。

主に土地にからむ紛争は最終的には当事者間の武力の優劣で決まるケースが多いとはいえ、政権に近い都人と姻戚関係を持つことで、中央での訴訟判決に有利な裁断を得れば、それを錦の御旗として味方を増やすことが可能になる。このため有力武士団は天皇の親戚（××王と呼称される）や都の貴族との婚姻を通じてコネを作ることを重視した。この場合、多摩に赴任する国衙の高位役人（守，介など）が対象になるケースが多い。都の役人が地元の女性と結婚し子供をもうける場合、当時の婚姻形態では子供は母親の家で育つことになるので、女性側の家にとってのメリットが大きい⁽³⁰⁾。また、こうした婚姻に応ずる男性側も、都での立身出世の見込みがないため女性側の家の財産が魅力となることが多く、これが、受領の土着化をうながすことになる。これにより、地元住民に都の血と肩書の有無と軽重を重視する貴種崇拝の考え方が広がることとなった。武士団の動向を探る上で、母系中心の系図を辿ることは非常に重要であるが、現存の系図は父系中心であり、貴重な手がかりが欠損しているのは残念なことである。

武力に長けた人物であることも血筋とともに彼らが重視する資質の一つである。陣の後方で組織的に軍を動かす軍師型の人物より、自ら先陣を切って敵陣に突撃する型の武人を多摩人は重視する。個々の役割分担を明確にした高度に組織化された活動をあまり間近に見たことのない多摩人が指導者に求める資質として、自分たちの技量の上を行く人物に注目するのはごく自然なことではある。

また、自分たちの権利を守る（財産を強奪しようとする敵から所領を護る、あるいは、手柄に見合った所領安堵や新恩給与を得る、等）ことを指導者自らが行動で示すことを重視する。彼らからみたときに手柄以外の基準で恩賞が与えられたり（平将門が近い親族のみを国司に任命したことなど）、恩賞行為の引き延ばし（元寇後の北条家の対応や後醍醐天皇の対応等）などは指導者の資質に疑いを抱かせる主因となる。また、武家による政治統治において明確な君主と家臣の概念が生まれる室町後期までは、棟梁はあくまでも仲間の代表という位置づけであり、その行動に賛同できなくなれば（利害関係が一致しなくなれば）直ちに離反することには何の抵抗もない。これは、棟梁の側から見るといつ部下が寝返るか分からない疑心暗鬼を生むことにもなり、離反する前にだまし討ちで謀殺するといった行為を頻発させることにもつながる。

多摩武士団が自らの意思で棟梁に仰いだ最初の人物は平将門である。将門は桓武天皇から数えて6代目にあたる（桓武平氏）。祖父の高望王の代に上総介として千葉に土着し、上総・下総・常陸で大荘園を経営していた一族である。ただし、当時はまだ完全に土着化していたわけではなく、

一族の若者の多くは朝廷の有力者の警護体験を介して朝廷への繋がりがあった。将門は当初、親族間の内紛で勇名を馳せたに過ぎなかったが、武蔵国司と地方武士団に支持された足立郡司との争いに介入して役人の横暴を糾す立場に立つ人物と判断され、これが指導者としての信任を集めた。

清和源氏の流れを汲む義家・頼朝なども多摩武士団に棟梁と目された人物である。彼らはもともと畿内に荘園を持ち、元来は多摩との直接の利害関係はなかったが、清和天皇から4代目にあたる満仲（義家の祖父）が鎮守府將軍を始め坂東各国の国司を歴任した関係で多摩との絆を深めた。多摩武士団から見ると、頼朝の代になるまでは朝廷との関係が強い棟梁であった。

鎌倉幕府を倒した際の多摩武士団の棟梁選びは注目に値する。1333年、後醍醐天皇討伐軍を指揮していた足利尊氏が天皇派に寝返って六波羅探題（京都）を襲ったのに呼応して、上野国新田荘の新田義貞が鎌倉幕府を滅亡させる。当初義貞が直接率いた武者は150騎にすぎなかったが南下する討幕軍に多摩武士が参加し、鎌倉に侵入するころには20万騎に膨れ上がったという。ところが、鎌倉を占領した軍勢の多くは新田義貞から離れ、鎌倉に残っていた尊氏の妻子の下へと集結した。足利と新田は同じ源義国（義家の子）を祖とするが、家格が違っていると見られており、鎌倉幕府の中でも足利家は代々要職にあったことが多くの武士にこうした行動をとらせたと言われている（佐藤, 1965, pp. 35-40）。

佐藤（1965）の記述には、この時の棟梁選びの理由の一つとして源平交代説も紹介されている。ここでの議論は室町時代でとまっているが、その後、後北条氏（伊勢平氏）が多摩を制圧したことを考えると、徳川家が源氏の流れを汲むと称して多摩の地へ乗り込んだ理由ももうなずける。

5. 結論—多摩の「独立」気風

中世史の流れから垣間見られる多摩人の気風をまとめると以下のようなになる。

対抗権力と適切な距離感を持つ武士団の独立心 多摩人の行動原理はあくまでも血族で構成される大家族（一族）であり、家族の現状と将来に対する安全が何よりも優先する（ここまでは日本や東アジアで普通に見られる）。この家族およびその拡張された集団が多摩では武士団として現れ、組織を維持するために構成員の中の屈強な男たちが敷地内で弓馬の技術鍛錬に努めた。多摩の特徴は、この武士団らが外部の権力に対して常に適切な距離感を保ちながら己を主張してきたことにある。言い換えれば、常に半歩先の流れを予測しながら、権力・反権力のどちらに立つべきかを自らが判断し、一旦決意した後は神風的な英雄行為で一族を護る。

組織化力の弱さ 同地域内の武士団の間に上下関係を作ることを嫌った傾向がある。そのため、地域内で複数の武士団が団結し、大組織に至る階層構造を作ることにはなかった。後世になると、長子相続や本家・分家の関係が出てくるようになるが、それでも本家が分家を支配する形にはならず、どちらかといえば仲が悪くなるケースが多い（特に室町時代の多摩）。いわば、外部の指導者なしには団結できない中核なき独立集団として常に動いていた。見方を変えると、

彼らの武力だけでは日本の政治構造を変えるには不足であると悟っていたのかも知れない。外の世界の動きに対する鋭敏な感覚 武士団独自にある程度の決断を行うことが許されながらも、外部の環境が大きく地域の将来に影響を与える地政学的位置づけにより、多摩人は外の動きに対する鋭敏な感覚を備えるようになった。古代における奥州と朝鮮半島、中世における京都など、馬による機動性を使った外の世界の動きの把握とそれに対する対応は他地域ではなかなか見られない。この機動性を支える基盤として東海道・東山道・武蔵路（後世になると三国峠を越えて北陸道へも通じる）の重要性を見落としてはならない。特に、府中を中心に太平洋にも日本海へも出られる利点は、畿内から東では多摩以外には見られない。

指導者の資質—武力と血筋 彼らが指導者として認める人物は、武力に優れていること（戦闘にあたっては常に先陣を切る）と血筋のよさ（朝廷の権力機構と繋がり得る立場にいるか、天皇の意向を受けられる可能性を持つ＝中央の政治力学がわかる／影響を与える）が必要条件となる。この両者を満たす血筋として、多摩で人気があったのは、清和源氏と桓武平氏の血筋であった。

6. おわりに

古代・中世史を通じて多摩の気風を探ってきたが、これは近現代にも受け継がれている。たとえば、明治以降に盛んになる生糸・絹織物の輸出や欧米の自由民権の思想などは、横浜を海外との窓口にして武蔵路（鎌倉街道）経由でダイレクトに多摩に繋がっていた。秩父事件が生糸暴落に対する不満を単純に爆発させただけでなく、自由民権運動と連携する形で展開するのも、外部指導者を担ぎ上げて流れを大きくしようという多摩気風に支えられた典型行動に思える。

現在の多摩は経済活動の中心地東京のベッドタウンとして多くの「よそ者」を迎え入れているが、彼らの活力を融合する形で新たな産業を興し、武蔵路のような南北の輸送路を活用して東アジア・東南アジアとの結びつきを強めれば、そこにかつての多摩人の（括弧なしの）独立気風による新たな風を起し得る余地は十分にあると思う。

注釈

- (1) 古来、「タマ」の表記は様々あり（多摩，多磨，玉，など），正書法が定まった後も各地にこうした別表記が残っている。これらの呼称については，文献の他，国分寺瓦中にも残されている（平凡社，2002, pp. 98）。
- (2) 明治11年（1878）郡区町村編成法による（平凡社，2002, pp. 98）。
- (3) 軍略経路としての太平洋沿岸の海路開拓の試みは中世まではほとんど成果がみられない。唯一の例外は，奥州・常陸に軍事拠点を持つ北畠顕家の戦死により窮地に陥った南朝方が，起死回生の策として伊勢大湊から常陸に向け軍勢を出陣させる（1338年9月）が，暴風に遭ってち

りぢりになっている (佐藤, 1965, pp. 172).

- (4) 当時の大河の渡河方法としては、底の浅い渡し舟、または、船をつなげて上に板をわたす船橋 (各地に今も地名として残っている) があるが、馬や重い荷物を運ぶには不向きである。更級日記冒頭には、雨の晴れ間を見て人や車を船に乗せ、下総から武蔵へと渡河する著者とその家族の苦渋の様子が描かれている (西下, 2001, pp. 8-10).
- (5) 中瀬の渡 (深谷市)、橘瀬、田口之瀬 (共に前橋市) など (斎藤, 2010, pp. 73)
- (6) 記紀による倭建命 (やまとたけるのみこと、日本武尊とも書く) の東征では板東各地を転戦しているが、南九州の熊曾 (くまそ、熊襲とも書く) のような強大な勢力には遭遇しなかったようである (倉野, 1999, pp. 121-124).
- (7) 五畿は大和・山城・摂津・河内・泉、七道は東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道である。道は現在のように道路を表すわけではなく、地域を表現するもの (北海道はその使い方が今でも残っている) だったが、やがて各国の国府を繋ぐ街道を「××道」と呼ぶようになった。
- (8) 相模の国府がどこに置かれていたかについては、国衙 (県庁の建物) 跡が発見されていないため、海老名市、大磯市など諸説がある。ちなみに、武蔵国の国衙は府中市大國魂神社境内にある。
- (9) 街道としての「東海道」は、相模国府へ至った後、三浦半島から浦賀水道を房総半島へ抜けることになる。房総半島の国名が現在一般的な東京湾沿いのルートを通ると、京からみた順序が下総・上総の順に並ぶが、古代「東海道」では、ごく自然に手前が上総、奥が下総となる。
歴史上、浦賀水道が注目を浴びる出来事が2つある。一つは倭建命東征の際の「それ (焼津) より入り幸 (い) でまして走水 (浦賀水道) の海を渡りたまひし時、その渡の神、浪を興して (云々)」 (倉野, 1999, pp. 123) であり、もう一つは、石橋山の戦いに敗れた源頼朝が上総広常を頼って渡った例である。
- (10) 鎌倉街道は1本の街道ではなく、坂東各地から鎌倉へ向かう複数の街道の総称である (斎藤, 2010, pp. 157)。主なルートとして、上道 (上野方面から府中を経て鎌倉へ至る)・中道 (下野方面から古河を経て鎌倉へ至る)・下道 (常陸方面から松戸を経て鎌倉へ至る) があり、中でも頻繁に用いられたのが、大河を渡る必要のない上道であり、元弘の変 (1331) の際に鎌倉進撃にあたった新田義貞軍は距離的には遠い上道を利用した。
- (11) 738年夏に北九州で流行した天然痘のため東国の防人を引き上げさせ九州の兵士に交代させた際の記録では、引き上げた防人の総数約2,000名のうち723名が相模・上総・下総出身者で占められていた (青木, 1965, pp. 224).
- (12) 日本國現報善悪靈異記 中巻 第三話「悪逆の子、妻を愛で、母を殺さむとして謀り、現に悪死を被る縁」 (板橋, 1975, pp. 74-75) に、「多摩郡鴨の里 (場所不明)」出身の防人が故郷に残し

た妻恋しさに、同行してきた自分の母を殺し喪に服するという口実で帰郷しようと企んだ話が載っている。

(13) 万葉集巻 20-4417(佐佐木, 1978, pp.325)

赤駒を山野に放し捕りかにて 多摩の横山歩 (かし) ゆか遣らむ

豊島郡上丁 (かみつよぼろ) 椋椅部荒虫 (くらはしべのあらむし) が妻 宇遲部黒女 (うぢべのくろめ)

による。豊島郡 (東京都豊島区) 在住の荒虫は、府中驛 (府中市) の国衙に一旦集まった後、横山 (多摩市) の尾根道沿いに東海道へ抜けて行った。ちなみに上丁は軍の階級を表す。

(14) 阿倍比羅夫遠征 (658) 以後の主な反乱とその平定には、

- 東北 38 年戦争 (774-811): 光仁帝・桓武帝・嵯峨帝と鎮圧に三代をかけた戦闘だったが、坂上田村麻呂が阿弋流為 (あてるい) を破る (801) ことで反乱は収束に向かった。
- 元慶 (がんぎょう) の乱 (878): 俘囚・夷俘 (朝廷に恭順を示した蝦夷) による出羽国衙「秋田城」襲撃・占拠事件。小野春風 (鎮守府将軍・相模介) による鎮圧 (実際は講和) によりおさまる。
- 前九年の役 (1051-1062): 源頼義・義家親子による安倍貞任・宗任兄弟の鎮圧。源氏に寝返った清原武則を傀儡政権に、義家は陸奥に影響力を残そうとしたが、武則が実権を握ることになる。
- 後三年の役 (1083-1087): 源義家が清原武則の後継者争いに介入。義家の支援を得た清原清衡 (後に藤原に改姓) が実権を握る (奥州藤原三代の始まり)。
- 奥州合戦 (1189): 義経討伐を口実にした源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼす。

がある。

(15) 平将門の乱は、平高望の遺族らの内紛 (935) から始まったが、やがて多摩郡で起きた官民の争い (民を代表する足立郡の郡司武蔵武芝と官を代表する武蔵権守興世王・武蔵介源経基らとの対立) を巻き込んで中央政府に対する反乱に発展し、反乱軍の指導者に祭り上げられた平将門の「新皇」宣言 (939) で朝廷との決定的対立に至るが、結局、坂東内の内紛により瓦解する。事件の経緯は『日本略記』や『今昔物語 本朝世俗部』など京都で書かれたものにも断片的に触れられているが、歴史家が依拠するのは『将門記』である。これに基づく詳しい経緯は北山 (2009) や福田 (2009) などに述べられている。

(16) 伊勢平氏の流れをくむ北条早雲を祖とする戦国武将の北条氏のこと。鎌倉幕府の執権職にあった北条氏と区別するため「後北条」と呼ばれる。

(17) 716 年に坂東およびその周辺諸国に居住していた高麗人 1,799 人を武蔵国に集めて高麗郡が創られ (北山, 2009, pp. 18), 758 年には「帰化の新羅僧 32 人, 尼 2 人, 男 19 人, 女 21 人」を武蔵国の閑地に移して新羅郡にしたとの記述や 760 年にも「新羅の帰化 131 人」を移した

との記述が『続日本紀』にある（平凡社，2002，pp. 104）。ちなみに，758年は新羅との関係が緊張化し，藤原仲麻呂による新羅征討計画が企てられた（実現はしなかった）年であった。

- (18) 後代の板東絹織物といえば桐生が有名だが，多摩も消費地江戸の流行を敏感に反映した最先端商品を提供する織物産地として人気があった。
- (19) 官僚として多摩で活躍した帰化人には，高麗郡出身で藤原仲麻呂の側近として中央政界でも活躍し武蔵国守として新羅郡創設にも関わったとみられる高麗福信がいる。また地方政界で活躍した人物に，武蔵国男衾郡（おぶすまぐん）の大領（長官）壬生吉志福正（みぶのきしふくせい）がおり，彼は自費で国分寺（国分寺市）の七重塔の再建を行っている。
- (20) 724年，藤原宇合（うまかい）を征蝦夷持節大將軍とする遠征隊が陸奥を平定する。多賀城（多賀城市）を設置。
- (21) 米の収穫による区分は大国，上国，中国，下国の4つである。坂東では，常陸，上総，上野，下総，武蔵が大国，相模，下野が上国，安房（上総から分割された）が中国である。
- (22) 官制の牧は全国に広がっているが多くはチーズ生産を目的としており（鶴田文三郎，2010，pp. 213-214），軍馬のための牧には坂東の戦略的重要性がみられる。
- (23) 各党の主な構成員は，
- 秩父党: 秩父・畠山・河越・江戸・小山田・稲毛・葛西
 - 武蔵七党（必ずしも七氏ではなく時代による入れ替わりもある）: 横山・猪俣・野与・村山・西および日奉（ひまつり）—同一氏族・児玉・丹あるいは丹治・私市（きさいち）
 - 鎌倉党: 大庭・梶原・長江・長尾・板倉
 - 三浦党: 三浦・蘆名
- である。田代（2009）に詳しい記述がある。
- (24) 宇治川合戦（1184）: 宇治川における木曾義仲と源義経との合戦。源平合戦（1180-1185，治承・寿永の乱ともいう）の中の一つ。
- (25) 鎌倉公方と関東管領の対立が決定的になるのは享徳の乱（1454-1482）で応仁の乱（1467-1477）よりも早い，すでに上杉禅秀の乱（1416）で公方・管領間の対立は顕在化していた。
- (26) 田代（2009）には，頼朝が奥州藤原氏討伐の途中で有力御家人の小山政光のもてなしを受けたときの話が紹介されている。

正光が頼朝の前に控えていた若者を指して何者かと尋ねたところ，頼朝は「本朝無双の勇士」の熊谷直家であると紹介した。それに対し政光は，彼らはずきしたがう郎党もいない小規模な武士だから，自分自身が命を懸けて直接戦わなければならなかったが，自分の場合は郎党を遣わして忠節を励むものであり，「君（頼朝）」のために命を捨てる覚悟には変わりはない，と言ったという。

（田代，2009，pp. 25-26）

- (27) 頼光と四天王にまつわる英雄譚には「大江山酒吞童子」「茨木童子」「土蜘蛛」「一条戻り橋」などがあり、文学や伝統芸能の素材として盛んに取り上げられている。とはいえ、都人にとって彼らは必ずしも英雄として崇めるばかりの存在だったわけではない。その行動を笑い飛ばすような逸話が今昔物語に載っている (佐藤, 1979, 巻 28 第 2 「頼光の郎党ども, 紫野見物の語」 pp. 10-13).
- (28) 源平の勢力バランスを制御できなかった朝廷側はやがて平清盛に政治中枢部を明け渡し、平氏没落後も政治の実権を武士に奪われたままの状況が続くことになるのは周知の事実である。
- (29) 鎌倉府を巻き込む紛争には、
- 観応の擾乱 (1350-1351): 尊氏対直義兄弟の対立に関東管領の上杉憲顕 (のりあき) が加わる。
 - 武蔵野合戦 (1352): 尊氏対新田義興・義宗兄弟
 - 上杉禅秀の乱 (1416-1417): 公方 (持氏) 対前関東管領 (禅秀)。將軍義時の介入で終結。
 - 永享の乱 (1438-1439): 將軍 (義教) 対公方 (持氏)。持氏の死により公方断絶。この後、関東管領が鎌倉府の実権を握る。
 - 享徳の乱 (1454-1482): 公方 (成氏) 对上杉家。持氏の子成氏が公方に復活し、関東管領上杉憲忠を謀殺したことから発生した争い。消耗戦の末に 1482 年に和睦。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』はこの時代を舞台にしている。
 - 長尾景春の乱 (1476-1480): 膠着状態にあった享徳の乱の最中に起こった乱。上杉家の家宰だった長尾家の跡目相続に絡む内乱。後を継げなかった長尾景春が上杉家に反抗。公方成氏が後押しをして大規模な戦闘に発展した。扇谷上杉 (管領上杉家の分家) の家宰太田道灌により平定された。
- がある。これらの紛争に多摩武士団がどのように関わったかについては、田代 (2009) に詳しい。
- (30) 都人を婿に迎えることに熱心な母親の逸話が『伊勢物語』(中河, 1972, 第 9 段, pp. 17) にある。むかし、をとこ、武蔵國まで惑い歩 (あり) きけり。さて、その國にある女をよばひけり。父は、こと人にあはせむといひけるを、母なむ、あてなる人にと、心づけたりける。父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむ、あてなる人にと思ひける。(以下略)
- 父親が結婚に反対したのは、男 (在原業平) に武士の家に迎えるには素質がなさすぎるとみたためだろう。

参考文献

- 青木和夫 (1965) 奈良の都。 (日本の歴史・第 3 巻) 中央公論社, 東京
板橋倫行校註 (1975) 日本靈異記。 (角川文庫) 角川書店, 東京

- 北山茂夫 (2009) 平将門. (講談社学術文庫) 講談社, 東京
- 倉野憲司校注 (1999) 古事記. (岩波文庫) 岩波書店, 東京
- 斎藤慎一 (2010) 中世を道から読む. (講談社現代新書) 講談社, 東京
- 佐佐木信綱編 (1978) 新訓万葉集 下巻. (岩波文庫) 岩波書店, 東京
- 佐藤謙三校註 (1979) 今昔物語集 本朝世俗部 下巻. (角川文庫) 角川書店, 東京
- 佐藤進一 (1965) 南北朝の動乱. (日本の歴史・第9巻) 中央公論社, 東京
- 田代脩 (2009) 武蔵武士と戦乱の時代. さきたま出版会, 埼玉
- 鵜田文三郎 (2010) チーズのきた道. (講談社学術文庫) 講談社, 東京
- 中河與一訳註 (1972) 伊勢物語. (角川文庫) 角川書店, 東京
- 西下経一校注 (2001) 更級日記. (岩波文庫) 岩波書店, 東京
- 福田豊彦 (2009) 平将門の乱. (岩波新書) 岩波書店, 東京
- 平凡社地方資料センター (2002) 東京都の地名. (日本歴史地名体系・第13巻) 平凡社, 東京
- 安田元久 (2008) 源義家. (人物叢書) 吉川弘文館, 東京